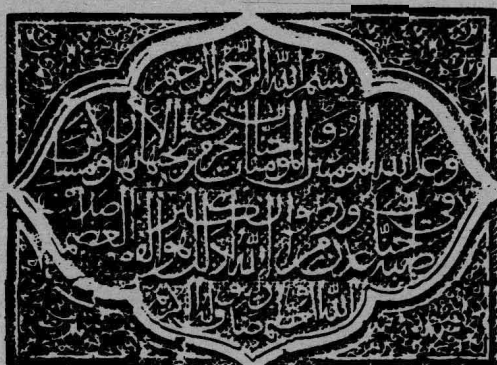


イスラム事典

平凡社

イスラム事典



監修

日本イスラム協会

嶋田襄平

板垣雄三

佐藤次高

平凡社

イスラム事典

1982年 4 月16日 初版第 1 刷発行

1982年 5 月27日 初版第 2 刷発行

編集兼発行者	下中邦彦
発行所	株式会社平凡社
	郵便番号 102
	東京都千代田区三番町 5
	電話 03-265-0451
	振替 東京8-29639
印 刷	株式会社東京印書館
製 本	和田製本工業株式会社
装 丁	三村 淳

定価2400円

©Heibonsha Ltd. 1982 Printed in Japan

不良本は直接小社読者サービス係までお送りください(送料小社負担)

目 次

イスラム事典刊行にあたって	i
執筆者・協力者	ii
本書の使い方	iv
総 説	
イスラム——嶋田襄平，板垣雄三	1
歴史の中のイスラム教徒——嶋田襄平	14
イスラムの国家と社会——佐藤次高，板垣雄三	25
事 典	50音順，825項目
付 表	
イスラム世界地図	414
イスラム史年表	416
ヒジュラ暦・西暦対照表	430
イスラム王朝交代表	436
系図	438
度量衡表	452
参考文献案内	453
索 引	467
地図一覧，本文挿図出典一覧	412

イスラム

イスラムはアラブの預言者ムハンマドが610年に創唱した一神教で、世界宗教として西アジア、アフリカ、インド亜大陸、東南アジアを中心に現在ほぼ6億の信者をもつ。正しくはアラビア語でイスラーム al-Islāmといい、「唯一の神アッラーに絶対的に服従すること」を意味する。信者をムスリムというが、それは「絶対的に服従する者」の意である。イスラムそれ自体が宗教の名であるから、イスラム教と呼ぶ必要はない。かつて欧米ではモハメッド教、マホメット教、中国で清真教、回回教、回教、日本でも回教と呼ばれたことがあるが、いずれも正しい呼称ではないために現在ではほとんど用いられなくなっている。

拡大するイスラム

610年にメッカでムハンマドがイスラムを創唱した時、その教えを信じてムスリムとなったのは、妻ハディージャ^{*}、いとこのアリー^{*}、友人アブー・バクル^{*}などわずか数人にすぎなかった。622年のメディナへのヒジュラ^{*}の時、同行したムスリムは70人余りであった。当時メディナにも70人余りのムスリムがおり、イスラムはわずか150人ほどの信者をもってその紀元(ヒジュラ^{*})元年を迎えたのである。

ムハンマドの没後、新しい指導者としてアブー・バクルをカリフ^{*}に選び定めたムスリムは、その指導のもとに大規模な征服を開始した。彼らは7世紀の半ばまでにササン朝の全領土を併せ、シリアとエジプトをビザンティン帝国から奪った。ウマイヤ朝の盛期の8世紀初めには、中央アジア、西北インド、北アフリカ、イベリア半島を征服し、その版図は西北インドを除き、そのままアッバース朝^{*}によって継承された。

征服者であるアラブは、最初、征服地の住民のイスラムへの改宗^{*}に熱意を示さなかった。しかし8世紀初めごろから、征服地住民のイスラムへの改宗が徐々に進み、それはアッバース朝の成立によって一段と促進された。9世紀になるとアッバース朝の支配は緩み、領内各地に事実上の独立王朝が自立して帝国の統一は失われていった。しかしこのころから、東方ではトルコ人^{*}、西方ではベルベル人^{*}の改宗が進み、彼らの新たな征服によってアナトリア、北インド、西スーダンがイスラムの支配に帰し、帝国の分裂にもかかわらず、イスラム世界(ダール・アル・イスラーム^{*})は、かえって拡大を続けた。このような征服によるイスラム世界の拡大は、オスマン帝国^{*}によるバルカン^{*}の征服と、デリー・スルタン朝^{*}、ムガル帝国^{*}によるインド亜大陸の征服によって頂点に

達した。

イスラム世界を拡大させたものは、単に征服だけではなかった。ムスリムの商人たちはイスラム世界を越え、遠い異境に自由に進出した。彼らのコロニーは周囲の異教徒の改宗の拠点となり、それが進むと現地の政権のイスラム化、または自らのイスラム政権の樹立に至る。ただ単に商人だけではない。教会の組織をもたないイスラムであるが、12世紀には神秘主義教団(タリーカ)が相次いで設立され、13~14世紀には、ハーンカー、ザーウィヤなどと呼ばれた修道場のネットワークが、イスラム世界のいたる所に張り巡らされた。異教徒の教化に最も熱心であったのは、このような神秘主義教団の教団員であり、彼らは殉教を願って異教徒の地に赴き、唯一の神への信仰を情熱をもって説き聞かせた。内陸アフリカ、トルキスタン、バルカン、インド亜大陸、東南アジアの島々のイスラム化は、主として彼らの努力に負うところが多い。

現在の世界のイスラム教徒の数を推計するのはきわめて困難であるが、ほぼ6億とみてよいであろう。それを世界の各地域ごとに挙げれば、(1)アラビア半島、シリア、ヨルダン、イラクなどの西アジアのアラブ諸国に3000万、(2)トルコ、イラン、アフガニスタンなどの西アジアの非アラブ諸国に8000万、(3)エジプト、スーダンなどアラビア語を国語とするアフリカ諸国に7000万、(4)アラビア語を国語としないアフリカ諸国に6000万、(5)インド亜大陸に2億、(6)東南アジアに1億、(7)ソビエト連邦、中国に5500万、(8)バルカンに500万となろう。しかしアフリカでは毎年かなりのムスリムの増加が見込まれ、ソ連、中国のムスリムの数はつかみ難い。610年にわずか数人の信者をもって始められたイスラムは、その後1400年近くを経た現在、西はアフリカの大西洋岸から東は東南アジアの島々にまで広がって6億の信者を持ち、その大部分がスンナ派、約1割がシーア派に属する。

イスラームとイーマーン・コーランの世界ー

ムハンマドは610年のある日、唯一神アッラーの啓示を受け、自ら神の使徒としての自覚を抱き、最後の審判の日に備えるよう人々に警告を発した。神の啓示はムハンマドの死まで彼に下り続け、後にこれを1冊の書物にまとめたものがコーランである。したがって歴史的には、イスラムは610年にムハンマドによって創唱された。しかしコーランに記され、ムスリムが信じる信仰の立場からすれば、イスラムは610年に始まったのではなく、天地創造以前から厳として存在しており、神とともに永遠なイスラムが610年に、神の使徒ムハンマドによって再確認されたのである。

永遠の昔、神は天地を創造し、天には日月星辰を、地には人類をはじめとする生命を創造した。神はただ自然と人類とを創造しただけでなく、自然に

は天体の運行や四季・風雨・昼夜の変化などの秩序を与え、人類には来世の天国を保証されるために現世で遵守すべき規範を授けた。神が人類に授けた規範がシャリーアであり、シャリーアに従って生きることがイスラムである。

慈悲深い神は人類を来世の天国に導くため、多くの預言者を地上に遣わした。アダムもノアもアブラハムも、みなこのような預言者であった。そればかりでなく、神は人類の導きのしるしとして啓示の書をも人類に授けた。モーセに授けられた律法の書(旧約聖書)、イエズに授けられた福音の書(新約聖書)がそれである。しかし人々は真のイスラムに目覚めなかった。神から遣わされた預言者に従わず、絶滅させられた人々もある。アードの民、サムードの民などがその例である。ユダヤ教徒とキリスト教徒も、彼らに授けられた啓示の書を歪曲し隠匿した。

アラブの遠い先祖アブラハムは、その子イシュマエルとともにメッカにカーバを建設し、これを住みかとしてアッラーに献上して、子孫の一人を使徒として遣わすよう祈念した。アブラハムは啓示の書こそ授けられなかったが、モーセよりはるかに古い預言者、ハニーフ、ムスリムであった。ムハンマドが説いたのはアブラハムの宗教の復活であり、彼に授けられた啓示の書コーランは、それに先立つ啓示の書を改訂したものである。なぜ、このようなことが言えるのであろうか。

天の上なる神のかたわらには、1枚の石板が大切に保管されているが、これこそ旧約聖書、新約聖書のいわば原典となった啓典の母体Umm al-Kitābである。神は人類をイスラムに導くため、ムハンマドを最後の預言者としてアラブの民に遣わし、啓典の母体をアラビア語のコーランとして彼に授けた。コーランと、それに先立つ旧約聖書、新約聖書との間に違いがあった場合には、神が啓典の母体に基づいて改訂したのであるから、最後に人類に下された啓示の書コーランが最も正しいということになる。コーランにはこのように記されている。

後のウラマーの整理するところによれば、コーランに記されたイスラムの教義はイーマーン(imān、信仰)、イバーダート、ムアーマラードからなる。イーマーンは、後にアッラー、天使、啓典、預言者、来世(アヘーラ)、予定の六信として定型化された信仰内容で、そのうちとくに重要なものがアッラーと、最後の預言者としてのムハンマドであることは言うまでもない。コーランでアッラーは唯一の神、創造者、慈悲深い方であると同時に、その信者(アブド=奴隷の意)の上に支配者として臨むものとされる。それ自体が被造物である偶像の崇拜は鋭く排撃され、他の罪ならば神の許しもありうるが、多神崇拜(シルク)は絶対に許されない。イバーダートは文字どおりには神への奉仕であ

り、宗教学でいう儀礼に相当する。後に五柱として定型化されたところから信仰告白(シャハーダ^{*})を除いた、礼拝^{*}、喜捨(ザカート^{*})、断食^{*}、巡礼^{*}のほか、コーランではジハード^{*}がとくに強調されている。ムアーマラートは文字どおりには行動の規範、中でも信者同士の人間関係であり、これには姦淫をしないこと、孤児の財産を食わないこと、契約を守ること、秤をごまかさないことといった倫理的なおきてのほか、婚姻^{*}、離婚^{*}、遺産相続^{*}、ハッド^{*}に関する規定から、利子の禁止、孤児の扶養と後見、賭け矢や豚肉を食べることの禁止、日常の礼儀作法の心得までを含む。要するにコーランは、唯一の神とその最後の預言者ムハンマドとを信じ、神に仕え、神のよしとする正しい人間関係を結び、来世は天国に迎え入れられよと教えるのである。

これまでムハンマドの創唱した宗教をイスラムと書いてきたが、コーランはムハンマドに啓示された宗教をただイスラムとだけ呼んだのではない。コーランはそれを特定の名で呼ぶことなく、呼ぶ必要のある場合には適宜イスラーム、イーマーン、ディーン^{*}、ミッラなどの用語を用いた。現在普通に認められているところでは、イスラームは唯一の神アッラーに絶対的に服従すること、イーマーンは心のうちなる信仰、ディーンは宗教一般、または内面的なイーマーンと外に現れたイスラームとを統一したものと解され、ミッラはアブラハムの宗教 *milla Ibrāhīm* という言葉に典型的に示されているように、過去の特定の預言者の説いた教え、ないし、そのウンマへの所属を意味すると考えられる。

これらの用語のうち、コーランで最も多く用いられたのはイーマーンであり、同時に、信者を意味する用語として最も多く用いられたのはムーミン *mu'min* である。イスラム時代の初期、イスラム教徒を意味する用語として普通に用いられていたのは、ムスリムではなくムーミンであった。このことはウマル1世^{*}の用いたカリフの称号がムスリムたちのアミール^{*}(アミール・アルムスリミン)でなく、ムーミンたちのアミール(アミール・アルムーミニーン)であったことによく示されている。コーラン49章14節に、「遊牧民たちは『我々は信じる āmannā』と言っている。言ってやれ、『お前たちは信じていない。ただ我々は服従する aslamnā』と言っているにすぎないのだ。お前たちの心の中にまだ信仰は入っていない(後略)』と」とあることにより、イスラム時代の初期にはイーマーンとイスラームとは別のもの、あるいはイスラームはイーマーンの前段階と考えられていたようである。

イスラムは典型的な世界宗教であるが、コーランがアラビア語で記され、しかもイスラムが征服者アラブの宗教であったため、イスラム時代初期のしばらくの間、イスラムとアラブとの同一視という現象がみられた。この時期

には征服地の住民のイスラムへの改宗は、ほとんど進まなかったが、マワリー問題^{*}、ウマル2世の新政策などを契機に改宗者の増加をみた。そこで問題とされたのは、どのような条件を充たせばムスリムとみなしてよいか、ムスリムとしての最低限の義務は何なのかということであった。8世紀前半のスナ派ウラマーの先駆者たちによる五柱の定型化は、まさにこのような要請に答えるものであった。コーランのどこにも、そのままの言葉では記されていない信仰告白は、ムスリムたる者の最小限度信じなければならないイマーンを、言葉によって表明することである。礼拝、喜捨、断食、巡礼は最小限度実践しなければならないイバーダートである。この両者を併せて五柱として定型化することにより、アッラーへの絶対的服従は五柱の実践にあるとされ、9世紀に至って、ムハンマドによって創唱された宗教を呼ぶ名としてのイスラームが確立された。すなわち信仰一般を指すイスラーム islām は特定の信仰内容をもつ宗教イスラム al-Islām になったのであり、同時に信者を呼ぶ名としてのムスリムも確立し、その後現在にまで至っている。

シャリーアの学—神学と法学の成立—

知識を意味するアラビア語にイルム^{*}、フィクフ^{*}、マリーファ^{*}、ヒクマがある。イルムは元来、努力によって習得される知識を意味し、したがってコーランやハディースに関する知識、すなわち神学的知識をイルムといった。フィクフは「既知のことから未知のことを推し量ること」「演繹」を意味し、その学問的方法的特徴から法学がフィクフと呼ばれた。マリーファは、スーフィー^{*}が達人にだけ許されるとする啓示または黙示に基づく神についての神秘的知識、あるいは感性的認識である。ヒクマは一般的に「知恵」「聡明さ」を意味するが、哲学者はこれをギリシア語ソフィアの訳語として用い、イブン・シーナー^{*}はヒクマを、「人間の靈魂の、学問と行為との範囲内で可能な完成への道程」と定義する。

後にイルムは学問一般を意味するようになるが、ムスリム最初の学問は、南イラクの二つの軍営都市(ミスル^{*})、バスラとクーファにおけるアラビア語に関する学問であった。それは、部族ごとに異なる方言を話すアラブ遊牧部族民と、労働者として住みついた現地の住民に標準アラビア語を教える必要上、コーランの言語学的研究が始められたからである。やがてそれは文法学の発達、辞典の編纂にいたり、コーランのアラビア語研究の補助手段として、前イスラム時代の占詩の研究も行われ、詩学と韻律学の発達をみた。最初にコーランの言語学的研究が始められたことの意義は大きかった。なぜならそれは、コーランの神学的・法学的研究の前提となったからである。

バスラのモスクの中庭に、車座になって熱心に師の教えに耳を傾ける一団

の若者たちがいた。車座の中心にいた師はハサン・アルバスリー^{*}で、彼の教えの中心は禁欲主義にあり、自由意志か予定かといった問題の立て方はしなかったが、罪についての人間の責任を重くみて、神に責任を転嫁することを固く戒めた。ハワーリジュ派^{*}の提起した罪の問題については、彼は大罪を犯した者をムナーフィクーン^{*}(偽善者)と呼び、このような者を殺してはならないが、地獄に落ちる可能性がきわめて高いので、正しい道に引き戻してやる必要があると考えた。彼の意図したことは、支配者・被支配者の双方を拘束するイスラムの宗教的・倫理的規範の確立にあり、コーランと、預言者ムハンマドの言葉と行為とによって確立された慣行(スンナ^{*})とを手掛りに、その規範を模索していたのである。このようなものが、イスラム最初の神学であった。

クーファとメディナの学者たちの主たる関心は、国家の法をイスラムの理念に基づいて体系化することであり、その手掛りはコーランとスンナと個人的見解(ラーイ)であった。ハサン・アルバスリーのスンナが、宗教的・倫理的慣行を意味したのに対して、法学者のそれは法的慣行を意味した。このスンナは伝承の形で表明されたが、もちろん厳密な意味でのハディースではなく、実際にはクーファやメディナの学者たちのラーイの平均値、つまり後世の用語でイジュマ^{*}と呼ばれるものであった。このようなものが、イスラム最初の法学である。

ハディース発祥の地は預言者の町メディナで、それは預言者の教えを守り、その人間像を後世に伝えようとするサハーバ^{*}(教友)の自然の情に発し、ムハンマドの死の直後から数多く語り継がれ、ズフリーによって最初に記録された。それは一方で、ムハンマド伝に始まるイスラムの歴史叙述の発達を促したが、他方、神学者・法学者ともハディースによってスンナを定立しようとするに及び、厳密なハディースの研究を志す学者たち、すなわちハディースの徒が生じた。法学者シャーフイー^{*}がイスラム法学の方法論を完成したのは、伝承の過程の記録イスナードをもって預言者にさかのぼる客観的なハディースを、彼の法源論に取り入れたからである。彼のもとに弟子たちが集まってシャーフイー派^{*}が形成されると、それより少し遅れてハナフィー派^{*}、マーリク派^{*}、ハンバル派^{*}が形成され、現在まで続くスンナ派の四法学派ができあがった。→イスラム法学

シャリーアについての学問は、狭義のイルム(神学)とフィクフ(法学)であった。シャリーアは、何を信じ、いかに行動すべきかを、神が人類に指示した命令の総体である。イスラム法は国家についての定義を欠き、多数のムスリムが集まって、ただ1人のムスリムの首長を選び定め、その責任のもとにイスラム法(シャリーア)の施行されるところが、すなわちイスラム国家であると

する。したがって、イスラム国家の定義はムスリムの定義に還元され、ムスリムの定義はイスラムの定義を前提とする。シャリーアに従って生きることがイスラムであるから、神学・法学の両面からのアプローチなくして、イスラムの定義は下しえない。神学と法学は相互に補完し合うシャリーアの学問として、ほぼ時を同じくして出発したが、法学がシャフイーによって方法論的完成をみたのに対し、神学はヘレニズム思想の洗礼を受けて、初めて方法論的完成に至った。

10世紀の後半、フワーズミーは《学問の鍵》Mafātīḥ al-'ulūm という書物を著し、当時行われていたイスラム教徒の学問を分類した。この書によればイスラム教徒の学問は、A. アラブ起源の学問、B. 異民族起源の学問とからなり、A に属するものは、(1)法学、(2)神学、(3)文法学、(4)書記学(行政文書作成法)、(5)詩学と韻律学、(6)歴史学であり、B に属するものは、(7)哲学、(8)論理学、(9)医学、(10)算術、(11)幾何学、(12)天文学、(13)音楽理論、(14)機械学、(15)鍊金術であった。

スンナ派信仰の確立

ハワリージュ派の過激な一派アズラク派^アは、コーランに処罰の規定された罪ハッド^ハを犯す者は、ムスリムとしての資格を失うとした。このことは、罪は人間の責任か、それとも神がなさしめたのかという問題、つまり自由意志説と予定説との論争を起こさせた。この論争で、自由意志説を唱えた者をカダル派^カ、予定説を主張した者をジャブル派^{ジャ}というが、前述の六信に予定が挙げられていることから明かなように、最終的には予定説が勝利を収めた。

しかし、この論争には判断保留という反応もあった。もと「延期する者」を意味したムルジア派^ムは、ハッドの罪を犯した者がムスリムとしての資格を失うかどうかは、最後の審判の日における神の審判に待つべきだとした。彼らの多くはクーファの初期法学者と重なり合い、彼らは地獄に落とされる者を1人でも少なくするため、イスラム法の体系化を通じて、現世に生きる行動の指針を人々に与えようとしていた。ムルジア派の判断保留は、単に罪の問題だけでなく、ウマイヤ朝とハワリージュ派・シーア派との抗争に対する政治的中立をも意味した。これと同じ思想的風土に生じたものにムータジラ派^ムがある。ムータジラと呼ばれた最初の人ワーシル・ブン・アターは、信仰(イマーン)と無信仰(クフル)の問題に関し、そのいずれでもない「中間の状態」を唱えたと伝えられる。ムータジラ派はムルジア派と同じ思想的・政治的中立の立場に立ち、ムルジア派が法学に傾斜したのに対して、神学への道を開いたといえよう。最初に彼らの意図したことは、イスラムの根本的な教義であるタウヒード^タ(神の唯一性)を合理的思惟によって弁護することであり、

神と被造物との隔絶性を強調して、神の本質における多様性を断固拒否した。これが彼らの「創造されたコーラン説」と、神の属性の否定となったのである。やがてヘレニズムの観念での神の正義と、それに裏付けられた人間の意志の自由とが強調され、アリストテレスの論理学が方法論となり、彼らは反対者によって「カラム^{*}(思弁)の徒」と呼ばれた。

アッバース朝初期の異端ザンダカ主義^{*}の流行に対し、政府は弾圧によって対処しようとしたが、ムータジラ派は合理的な神学の確立によって新改宗者の不満を吸収しようとした。だが彼らの合理的な学説は、イブン・ハンバル^{*}をはじめとする保守的なウラマーだけでなく、ムスリム大衆の支持するところとならなかった。カリフ、マームーンによるムータジラ派の教義の公認も、やがてムタワッキルによる取消しの憂き目をみることとなる。この時にあたり、もとムータジラ派に属したアシュアリー^{*}は、同派から学んだカラムを方法論としながら、信仰においてイブン・ハンバルの教義を受け入れることを宣言した。このようにして、啓示を理性によって支持するスンナ派の合理的な神学が唱えだされ、この時以後、スンナ派神学はカラムと呼ばれるようになる。→イスラム神学

バイト・アルヒクマ^{*}の建設後、アリストテレスの哲学書は相次いでアラビア語に翻訳された。もとムータジラ派に属したキンディー^{*}は、アリストテレス哲学の基礎的概念をより正確に理解しようとして、ムスリム最初の哲学者となった。イスラム哲学の出発点には、新プラトン主義思想によって解釈されたアリストテレス哲学があり、その終点には、イブン・ルシュド^{*}を集大成者とする膨大なアリストテレス哲学の注釈書があった。キンディーとファーラービー^{*}は、ムータジラ派と同じく、啓示と理性の調和を信じて疑わなかったが、イブン・シーナー^{*}にいたり、神学と哲学はそれぞれの越えられない限界を悟った。哲学者はいよいよ純粹に自らの理論をたどり、神学者は哲学者を危険視し始めた。しかし、イブン・ルシュドを最後にムスリムのアリストテレス学派の伝統は絶え、その後はイブン・アルアラビー^{*}の神智学と、スフラワルディー^{*}の照明哲学の結びついた十二イマーム派の神学的哲学が、イラン世界で独自の発展をとげたため、イスラムにあっては、啓示と理性とのぎりぎりの対決は回避された。

イスラム神秘主義の起源については学者によって意見が分かれ、ある者は外来の要素を重視し、他の者は内的発展の立場に立つ。イスラム神秘主義がコーランの教えと無関係でありえないのは当然であるが、イスラムの神秘的要素とイスラム神秘主義とは、決して同じものではない。イスラム神秘主義は9世紀から10世紀にかけて、神への愛、神との合一であるファナー、神に

ついでに神秘的知識であるマリーファという三つの要素を統合し、その境地に至るためのジクル^{*}、サマー^{*}等の修行の方法を整えて成立したとするのが、現在のところ最も穏当な見解であろう。イスラム神秘主義は、シャリーアの形式主義化に対する反動として生じ、神秘主義者はこのような結果を招いたものとしてウラマーを非難し、両者の関係は緊張していた。アシュアリー派の神学者ガザリー^{*}は、イブン・シーナーの哲学を批判的に摂取するとともに、信者の最高の霊的体験としてのファナーを高く評価し、人格的な神秘的宗教体験のうえにスンナ派神学を再建した。ガザリーこそ、学者の敬虔さと哲学者の厳密な方法論、そして神秘主義者のひたむきな神への情熱を一身に統一し、イスラム思想に完成をもたらした人といえよう。一部の神秘主義者の汎神論的傾向、神秘主義教団の聖者^{*}崇拜は、イスラムの信仰にとって危険な要素をはらんでいた。しかし、ガザリーが神秘主義思想を厳密な哲学的概念で武装し、教団も聖者崇拜を宗教的社会運動の枠内にとどめる努力を惜しまなかったために、全体的にイスラム神秘主義はスンナ派信仰から逸脱するものとならなかった。

スンナ派^{*}は、カリフ^{*}は預言者ムハンマドが併せもった宗教・政治の両権限のうち、政治的権限だけを継承したとして、立法および教義決定にかかわるカリフの宗教的権限を認めない。ただ現実には、ウマイヤ朝のカリフが異端と称せられる者を処刑し、アッバース朝でもマームーンがムータジラ派の教義を公認し、ムタワッキルがこれを取り消すということがあった。しかし、ムハンマドの宗教的権限を継承したものは、理論的にはムスリム全体のイジュマー(合意)であって、実際には、それはウラマー、中でもムジュタヒド^{*}のイジュマーにゆだねられる。今日我々がスンナ派と呼ぶものは、中世ムスリムの文献では普通「スンナとジャマーア(全体)の民」ahl al-sunna wal-jamā'aと書かれていた。この名から明らかなように、スンナ派はまず多数派でなければならず、同時にウラマーが、イジュマーの結果としてスンナ(確立された慣行)と認めるところを、受け入れるものでなければならなかった。このように、ムスリム多数の信仰に立脚するスンナ派は、ギブ^{*}の指摘するとおり、「意見の相違は信仰の内容を豊かにするもので、むしろ神の恩寵であるとする寛容さ」を特徴とする。カダル派、ムータジラ派は最終的にはスンナ派に吸収され、哲学は方法論を、神秘主義は人格的な霊的体験を提供し、あげてスンナ派の信仰内容を豊富にすることに奉仕した。「神は唯一にして、ムハンマドは神の使徒である」という簡潔なシャハーダ^{*}(信仰告白)こそ、スンナ派の寛容さを端的に物語る。

イスラムの国家構成法は、多数のムスリムが集まってイスラム国家をつく

り、ただ1人のカリフを選び定め、彼にイスラム法シャリーアの施行の全権限をゆだねるという前提に立つ。イスラム世界に3人のカリフが並び立ち、諸国家、諸王朝が各地に分立し、アッバース朝のカリフがブワイフ朝、セルジューク朝の武家政治のもとに置かれた時、法学者は法を現実と妥協させるか、それとも神授の法の純粋性を護持するかの深刻な二者択一を迫られた。彼らは後者の道を選び、「イジュティハードの門は閉ざされた」と称し、その後のいっさいの新立法の道を固く閉ざした。このことは、単に法学上の問題だけにとどまらず、神秘主義がスンナ派信仰の中にその場所を得、一般に神秘主義的傾向が強まったことと相まって、スンナ派神学の固定化を招いた。その後イブン・タイミーヤのように、イジュティハードの門の閉鎖に強く反対し、神秘主義者の汎神論と聖者崇拜を鋭く非難する者もあったが、12世紀以降近代に至るまで、スンナ派イスラム世界に思想の安定化と固定化の時代が訪れる。

諸宗派の活動

前近代のイスラムにあって分派的宗派とみなしうるものは、それぞれの分派を含むハワーリジュ派とシーア派である。ハワーリジュ派の活動は早く衰え、現在ではアルジェリア南部、アラビア半島のオマーン、そこから伝えられた東アフリカのザンジバルに、その一派イバード派の信者がわずかに存在するにすぎない。他方シーア派の信者は、全ムスリム人口の1/6を占めると推定され、イラン、イラク、パキスタン、レバノン南部に多く住み、その大多数は、サファビー朝によって国教とされた十二イマーム派に属する。

欧米でも日本でも、スンナ派はしばしば正統派と訳され、これに対してハワーリジュ派、シーア派は異端とみなされる傾向にある。しかし両者の関係は、キリスト教における正統と異端とは本質的に異なる。キリスト教における異端は、古代では公会議における神学論争の結果として、中世では確立された教会の権威、公認された教義への不服従として生じた。イスラムには教会がなく、したがって公会議もないのであるから、一方を正統、他方を異端と決めつけることはできない。そればかりでなく、ハワーリジュ派、シーア派の起りは、スンナ派という観念および実体の成立よりはるかに古く、しかもその起源は政治的であった。アシュアリーの《イスラム人の教説》Maqā-lāt al-Islāmiyyīnが、ムハンマド没後の初代カリフ選出をめぐるムハージールン(移住者)とアンサール(援助者)との対立が、イスラムにおける意見の不一致の始まりで、それは第1次内乱において決定的になったという趣旨のことを述べているのは、イスラムにおける宗派の起源が政治的なものであったことを正しく指摘するものである。ハワーリジュ派、シーア派の起源が政治的

なものである以上、両派は主観的には「正統」であり、彼らが敵対したその時々政治権力こそ、異端の権化にほかならないとみなした。両派が分派にとどまったのは、政治権力との戦いに敗れ、ムスリム全体の中で少数派に甘んじなければならなかったからである。しかし少数派が多数の中にあって、自らの抵抗の姿勢を崩さない時、彼らはその姿勢と主張とを正当化するために理論武装をしなければならない。そしてこの理論武装のゆえに、両派は政治的党派から宗派へと発展したのである。

ハワーリジュ派が自らを武装した理論は、その極端なまでの律法主義、罪は信仰を失わせ、大罪を犯した者はムスリムとしての資格を失うという罪の問題、ムスリムの最高の指導者イマーム^{*}は、特定の家系・民族にかかわりなく、最も優れたムスリムであるべきだというイマーム論であった。シーア派にあっては、イマームはアリー^{*}の血を受けた者でなければならず、彼はムハンマドの併せもった宗教・政治の両権を継承し、しかも無謬であるという独特なイマーム論であった。しかしアリーの子孫も数多く、そのうちだれをイマームと認めるかによってシーア派の分派が生じた。

長い歴史の間に、ハワーリジュ派、シーア派とも極端な行動と主張に走るものがあつた。アズラク派^{*}は無差別な殺戮で恐れられ、イスマエール派^{*}は、コーランには文字どおり(ザーヒル)の解釈のほかには隠された(バーティン)奥義的解釈があり、それはムハンマドからアリーを経て代々のイマームに伝授されたと主張し、バーティン派^{*}とも呼ばれた。このような主張は、イスラムと無縁な個人崇拜を容認するものとして、スンナ派から厳しく非難されたが、シーア派の一派にはイマームに超人間的な性格を付与し、最も極端な論をなすものは、アリーおよびその子孫のイマームを神の化身とみなすにいたつた。

十二イマーム派は第12代イマーム、ムハンマド・アルムンタザルのガイバ(隠れ)とルジュウ^{*}(再臨)とを説くが、そのイマーム論は一定の節度を堅持する。彼らはシャハーダ(信仰告白)の後に、「そしてアリーは神のワリー(友)である」という一句を付け加え、イスラム法で定める巡礼のほかには預言者やイマームの墓への参詣であるジャーラを信者に義務づけているが、六信五行そのものは決して否定しない。またムスリム全体のイジュマ^{*}(合意)なるものは認めないが、ハディース六書の権威は承認し、ただそのほかにはイマームの言行録(アフバル)を重視する。このようにイマーム論を除き、スンナ派と十二イマーム派との間に融和の余地がないわけではなく、歴史上、十二イマーム派をジャーファル派と呼んで、スンナ派の四法学派と並んで位置づける試みも再三にわたってなされたが、結局さしたる効果をあげなかった。

近代のイスラム—イスラムの革新を求めて—

ナポレオン軍に占領されたカイロで、歴史家ジャバルティー^{*}は、激動のヒジュラ暦1213年(1798/9)最大の事件は、エジプトからのメッカ巡礼がやんで、キスワ^{*}が送れなかったことであったと記した。外からの力の衝撃よりも、内的な力の衰弱が重大視されていた。18世紀を通じてムスリム諸国家の衰退が進み、19世紀には総崩れ的情勢が生じて、ヨーロッパ^{*}支配が拡大した。そのもとの社会構造の激変、価値観の混乱、文化摩擦、無力感、ことにそこでのイスラム法および伝統的社会組織の解体が、イスラムの危機という意識を強めた。しかも事態の深刻さは、このような変動や危機がむしろムスリムの権力を導入口としてもたらされた(オスマン帝国^{*}、ムハンマド・アリー^{*}の国家、カージャール朝^{*}、ムガル帝国^{*}において)ということである。ここから、イスラムの歴史を反省し「現状」の変革を要求するイスラム改革運動が起こってくることになる。政治的隷従がイスラムの危機を結果したのではなく、イスラムの危機が政治的隷従を結果したのだというようにみられた。隷従への陥没を、初期イスラムの精神を失って無自覚のまますぎてきた自らの社会と思想の主体的弱さの結果だと考え、それを乗り越えるためにこそ主体の真の力量を回復することが迫られており、しかもそれは可能なのだとする確信が、近代のイスラムを特徴づけている。すなわち、墮落し衰弱したイスラムを真に力あるイスラムに変えるエネルギーが、イスラムそれ自体のうちにあるはずだ、とする信念である。ヨーロッパへの従属がもたらす悲惨や屈辱の現実のもとで、抵抗の足場を探り、自らの価値を獲得し直そうとする時——それはナフダ^{*}と呼ばれた——、問題は常にイスラムの原点の回復、原則への復帰ということに戻っていくのである。そこにはしばしば、サラフ(祖先)のイスラムへの回帰(サラフィーヤ^{*})の主張、硬直化したイスラムの徹底的改革、新しい時代に即応したイジュティハード^{*}の再開、すなわちイスラム法の創造的適用への要求があった。そしてまた、そこには、批判し抵抗する主体、闘う共同体の意識を、国土や根拠地に根ざして発酵させようとする運動としての強烈なジハード^{*}の志向もまたみられた。

第1に挙げなければならないのは、アラビア半島に起こったワッハーブ派^{*}の運動である。そこで発揮されたイスラムの復古的純化の思想と共通のものは、インドのシャー・ワリー・ウッラー^{*}の立場や、またその影響下で北インドにジハードを展開しようとしたサイイド・アフマド・バレールビー^{*}のムジャーヒディーン運動^{*}、あるいはベンガルで強力な展開を示したファラーイジー運動^{*}などにも、これを見いだすことができる。イスラム神秘主義を再編してタリーガ^{*}の伝統的組織原理を新しい時代に生かしつつ、北アフリカに抵抗

線を形成したサヌシー派^{*}や、禁欲と清貧の強調と強烈なメシア主義の上にジハード国家を築いたスーダンのマフディー派^{*}も、それぞれに、近代イスラムの上述したような内的動機づけを明確に呈示するものである。西アジア、インド亜大陸、北アフリカにわたる多様な運動の軌跡の中で、抵抗する民族主体の形成とイスラム改革とを不可分の課題として主張したアフガーニー^{*}は、帝国主義の脅威に対してイスラムの自己変革に基づく抵抗の統一・連帯を強力に訴えた。現在にまで及ぶ彼の影響力はとくに注目に値する。アフガーニーの政治的行動主義からは離れたが、イスラム改革の固有の課題に最も本格的に取り組もうとしたのが、ムハンマド・アブドゥッ^{*}や、またその弟子のラシード・リダー^{*}であった。しかし、これらの人々の運動の中では、現実からイスラムに問題を投げかけるモダニストの立場と、イスラムに照らして現実を変えていこうとするファンダメンタリストの立場との対立が、顕著に現れてきた。前者は政治的にリベラルであり、国家と宗教との分離を前提とし、信仰を個人の内面の問題としてとらえる世俗主義・世俗化^{*}の立場をとる傾向を示すのに対し、後者は政治的・社会的に守旧的であるか、もしくは著しくラディカルであり、イスラム国家という形式で宗教と政治の一致を目指す場合が多い。

1930年代以来、これらの近代イスラムの諸潮流は、たとえばイスラム同胞団^{*}やジャマアアテ・イスラーミー^{*}の場合のように、広範な大衆の参加する社会運動としても示されるようになっていたが、70年代からはさらに新しい段階を急速に切り開きつつあるようにみられる。ここでは、イランのイスラム革命^{*}やメッカのカーバ占拠事件などの露頭の基盤として奥深く広がっている大衆の全般的政治化・急進化状況が生じており、その中で、イスラムの革新とイスラムによる革新との課題がより全面的に、より根源的に問い直されつつあり、その結果、この問題に関して既存のあらゆる運動や立場の客観的な意味と位置とが鋭く、烈しく変換されつつあるからである。しかもイスラムの問題提起こそ、第三世界にとって、さらには普遍的に人類全体にとって、新しい価値と秩序との積極的・形成への重大な方向づけを与えるものなのだ、という主張が、イスラムの名においてますます強く叫ばれるようになってきたからでもある。

イスラムを非西欧的価値体系の一つと指定して、イスラム対ヨーロッパという単純な対立の図式を設定し、ヨーロッパ的原理を批判するイスラム勢力というような見方でイスラムの近代史を割り切るのは正しくない。しかしまた、イスラムも近代世界の大勢に押し流されて変貌と変質をとげていかざるを得ないだろうという見通しで割り切ってしまうわけにもいかない。自らの